

こんな本 あんな本

川崎千束

て、保育者のほほも紅潮してきました。この本を家庭にいる四歳児にも見せました。二度三度とせがまれて読むうちに、これもまたしぐさをはじめました。魚形のしょう油さしを見つけてきて、最初のページの小さい魚の発見から始まり、発泡スチロールの箱を怪物

が、ダメになる絵本とはどんな絵本かと反問したくなります。四歳児の心をとりこにした魅力に文句なしに頭がさがります。

もちもちの木 岩崎書店

齊藤隆介作 滝平二郎絵

の大魚に見立てて、テーブルの上からとびかかり、「歯もたちません」とせりふ入りで、片足に包帯して仰向けに寝ころがったり、チラッチラッ、怪物の魚を片眼をつぶつて振り返つてみたり、電気を消して真暗な海。

馬場のばる著 こぐま社

幼稚園の年長の男児たちがこの本を愛続して卒業期に劇化しました。その劇の何といきいきしていた事でしょう。十一ぴきのねこがみんな主演顔で、し

「ああねこたち、たべちゃった」たぬきのおなかで最高潮になり、セーテーの下にボールを入れてたぬきのおなかを表現し、テーブルの上で大の字になりました。よだれをこぼして大満悦。ひとりで十一ぴきを熱演してあきることをし

書きましたが手離す事はなく、好きなページが断片的にあります。三番目の白地に紺で画かれたモチモチの木を「朝のモチモチの木」と勝手に解釈してよく見ています。肝心の、このどちらの木に灯がついた画面はそれほどものを感じないようで、むしろ、「しもが

足にかみついた。足からは血がでた、

という豆太が懸命に走る場面をよく見ています。本の中のことばでは、"ジサマア" "しょんべんか" "ヤイモチ" モチモチの木イノ実イオトセエ" が大ききで、祖母をジサマにしてしがみつきにきたり、その反対に自分がジサマになつたりしている状態は、臆病な豆太の性格に共感するのでしょうか。

まだこの本を丸ごと理解できないようですが、印象の強い断片がそのうち彼の心の中でつなぎ合わされ、この本の持つ本当の味わいをよみがえられる日が、きっとあるでしょう。私はかつて夜ふけの雪みちの街燈下で、美しい雪姫の幻影を見たことがあるので、あかりに輝くモチの木が頭の中にくつきりと浮かびあがってきます。

おとのの本から子どもに関連のあるものとして二、三あげました。

わが遍歴の山河 東山魁夷 新潮社

この著者の「馬車よゆつくり走れ」に、より感銘したのですが、長くなるのでこの方を選びました。

私はよく山の子ども達と遊んだもので、湊をたらしている子ども達が、写生をしている前へ立ちはだかつても、その頃の私は幸福そうな顔をしていました。純粹に画家であるよりも、もつ

と他のもの、いわば人間であつたからです。それはたしかに道草でした

しかし、この道草があつたればこそ、今日の円熟があるのだと私は思います。

続 雪椿 茅誠司 雷鳥社

科学的とはなにか、小学生の作文を引用して、蝶のよく来る木、寄りつかない木の発見をする素朴な道程など、

この隨筆のすぐれた感覚と、深く広い学識と、気どらない筆致とによつて標題の意味がよく理解されます。

心の風物詩 島崎敏樹 岩波新書

まぼろしの観光旅行、ある高校のデラックスな関西から九州までの修学旅行で、この若者たちの生の歴史にござみこまれたものは、奈良の古寺でも阿蘇の火口でもなく、裏町のバーの夜景であり、ホテルのベッドの感触であつた。紙の上だけの保育計画と似たような話です。

私の読んだ本 松田道雄 岩波新書

同じ世代を生きた私には、著者の足とともに及ばないながら、なつかしい書名が散見されて一気に読みました。それにしてもこの著者の、幼年期に本らしい本を読まず、友だちとの遊びに夢中だった事実をかみしめて考えてみる必要があるようになります。

(東京家政大学附属幼稚園)